「ヘッドフェイク」を利用した英語教育の試み

宮　前　和　代

1.　はじめに

2007 年 9 月，カーネギー・メロン大学の講堂で，1 人の教授が「最後の講義」[1]を行った。教授の名はランディ・パウシュ 46 歳。ディズニーランドのヴァーチャルリアリティにも貢献したコンピュータサイエンスの第一人者であり，多くの後継者を育てる優れた大学教員でもあったが，彼はこの講義の 1 ヶ月前，膵臓がんの転移のため余命宣告を受けていた。死を目前にしているとは到底思えない，エネルギーとユーモアに溢れた感動的なこの講義は，講堂を埋め尽くした観衆のスタンディングオベーションに迎えられ，インターネットで動画配信されてまたたく間に 600 万のアクセス数を獲得したと言われている。彼が熱く語った「夢をかなえることの大切さ，生きることの素晴らしさ」は何度聞いても胸を打ち，2008 年 7 月の彼の死の後もけっして色あせることがない。

本論の目的は，しかしながら，パウシュ教授のこの講義が筆者に与えた感動を細々と語ることではない。本論で述べようとするのは，彼が講義の中で紹介した概念の 1 つ「ヘッドフェイク」に触発された筆者が，自らの授業を内省し，この概念を英語教育の中に取り込もうとした試みについての報告である。

「ヘッドフェイク」とは，簡単に言うと，何かを人に教えるときに，何らかの作業を，その行為の先にあるものを本人に意識させないままやらせてし

---

[1] *Randy Pausch's Last Lecture: Really Achieving Your Childhood Dreams* (Carnegie Mellon University)。以下のサイトで動画を見ることができる。
http://www.cmu.edu/randyslecture/index.shtml

まい，作業が終わったときには本人が意図していなかった技術や知識を自然に身につけさせてしまうといった指導方法のことである。

パウシュ教授は，「人間が学ぶことのほとんどは『間接的に』，つまり『ヘッドフェイク』を通して学ぶ」[2]のだと主張し，「ヘッドフェイクの達人」こそ教育者として，技術者としての彼が目指すところであると語る。実際，講義の中では，プログラミングが必ずしも得意ではない女子学生が自分なりのストーリーを展開させることに夢中になっているうちに自然とヴァーチャルリアリティ技術を身につけていく様子が紹介され，教授の究極の夢の実現は，初心者が簡単にプログラミングを学べる革新的な 3D アニメーション作成プログラム「Alice」の開発，すなわちヘッドフェイクの具現化であったと語られる。

パウシュ教授のこの主張と業績は，筆者に自分の授業姿勢を根底から省みるきっかけを与えた。筆者はこれまで，学習者が子供ならともかく，ある程度の年齢に達している場合には「知らず知らずに」「無意識のうちに」身に付くなどということはあり得ず，学習者が明示的な目的意識を持ってこそ効果が上がるのだと信じてきた。目標を学習者に気づかせないタスクという発想は全くしたことがなく，それどころか，常にその科目の，その日の授業の，あるいはその特定のタスクの目指すところをできるだけ明確にして学生自身に自覚させるように心がけてきた。しかしながら，あらためて考えてみれば，有目的的な学習ばかりが成果を挙げるわけではないことも明らかであったし，自らの経験からも，間接的に学んだことの方が格別の深みや持続性を伴っていることが多いと言えた。いったいなぜ，大学の英語授業だけは有目的でなければならないと思い込んでいたのだろうか。きっと，何か別の作業をさせていながら無意識のうちに英語力を増強させていく方法もあるはずで，それは英語教員として試みる価値があると考えた。

そういう背景から，本論では，筆者が H21 年度に担当した「国際事情（英

---

[2] http://www.youtube.com/watch?v=ji5_MqicxSo&feature=PlayList&p=BCD362F95A724D1E&index=0&playnext=1　11 分 34 秒

語）」にヘッドフェイクの発想を取り入れようとした試行錯誤の経過を報告する。この「国際事情（英語）」を対象としたのにはいくつか理由がある。第一に，英語を主眼としていながら学習者の習熟度の差が大きいためにクラス運営に行き詰まりを感じていた授業だったからであり，第二に，にもかかわらず英語面での指導に力を注ぐと学習者の拒否反応が強く出てしまう科目だったからである。

ヘッドフェイクは「苦労せずに，楽をして英語を習得する」という「耳障りのいい」概念とは一線を画する。「それなりの努力はしてもらう，しかし，『英語のために』しているということは忘れた努力をしてもらって，その上で『英語力』という果実を手に入れさせようとする」方法論である。英語に対する苦手意識や拒否反応の強い学習者には，きっと有効であるに違いないと考えた。

本稿で示そうとする実践報告は時間も方法もケース数も不十分で，客観的に成果が上がったとも，あるいは，従来の方法に取って替わるべきものとも主張するものではない。ただ，これが筆者自身にとっては意味のある発想の転換であったこと，科目によっては使える方法論であることを示したいと思う。また，この視点は思いがけず，筆者が宮前(2009)で論じた，習熟度別授業の効果への 1 つのアンチテーゼを呈する結果ともなったことにも触れておきたい。

本稿の構成は以下のとおりである。2 節で「国際事情（英語）」の科目概要と過去 2 年間の実践，問題点を報告し，3 節ではそれを打開するきっかけとなったパウシュ教授の「ヘッドフェイク」の概念をもう少し詳しく紹介する。4 節では，ヘッドフェイクを取り入れた「国際事情」の授業実践について述べ，5 節を結語とする。

2.　政治学科の「国際事情（英語）」

2.1　科目の概念

ここで扱う「国際事情（英語）」とは，専修大学法学部政治学科の 2 年次

生に配当される必修科目の 1 つで，グローバル化した世界を前提に，学生の広範な問題関心を刺激し，同時に外国語の能力を高める目的をもって設置された[3]。同じ趣旨の科目がフランス語，ドイツ語，コリア語でも開講されており，学生は自分の興味と力に合わせてそのうち 1 カ国語を選択する。やはり英語を希望する学生が多いので開講数としては英語が 4 コマ（内，英語母語話者の教員が 2 コマ，日本人教員が 2 コマ担当），他の言語はそれぞれ 1 コマである。新設学科なので，最初の入学者が 2 年生になる 18 年度から完成年度である 21 年度まで担当者は固定で，筆者は 21 年 10 月現在で 2 年半担当したことになる。

科目の目標は世界諸地域の社会・政治・文化に理解を深めながら実践的な英語力を増強することである。その目的へのアプローチとして，筆者は初年度の講義要項に次のように記した。

> 世界で日々発信されている英語のニュースや論文を読み，日本国内の報道・論調と比べたり関連する視聴覚教材を見たり，それについて自分はどう考えるかを議論したりします。言語が違うということは，世界の切り取り方が違うということ。ひとつの事象について別の文法と別の論理で書かれた「見方」を学ぶことは，自分の視点を広げてくれるはずです。まずその問題を論じるのに必要な基礎知識と基本語彙を学び，英文を速く正確に読める力をつけていきましょう。その上で，それを批判する力を目指しましょう。

2.2　最初の 2 年間の実践

スタートした新科目は，しかしながら，筆者にとって最も運営困難な授業となった。

教材には困らなかった。現代の諸問題を紹介しながら時事英語の読み方に慣れさせるように編まれた英語教科書を基本に据え，加えてその時々に話題になっている題材を内外の新聞・雑誌から持ってくるようにしたのだが，時

---

[3] 専修大学法学部政治学科『政治学科教員用手引—新学科カリキュラムの目的と基礎科目指導について（2009 年度版）』，p. 7。

々刻々，興味をひく記事はいくらでもあった。コピーやワークシートを準備していたにもかかわらず，それよりさらに扱いたいニュースが勃発したためにそれらを反古にし，授業前夜に新しい教材に差し替えることも一度や二度ではなかった。

例えば初年度（2007 年）は国民投票法の成立，異常気象，ゴア元米国副大統領のノーベル賞受賞，アメリカのヴァージニア工科大学の銃乱射事件，安倍首相の突然の退陣。2008 年には北京オリンピックを巡っておきたチベット暴動や聖火リレーの騒動，米国発の金融危機，米大統領選挙，国内では洞爺湖サミット，二年連続の首相突然退陣，ノーベル物理学賞・化学賞で日本人 4 人が受賞。それらのニュースから発展して，日本国憲法前文とアメリカ独立宣言を読み比べたり，憲法 9 条についてのさまざまな評価を読んだり，アメリカの中学校の教科書や大統領選のウェブサイトからオバマ大統領が誕生するプロセスを追いかけたり，世界各国の政財界人のダボス会議での演説を You Tube で視聴したりもした。なるべく生きが良いニュース，日本での扱われ方と論調の違う海外ニュースを扱おうと，あれこれ迷いながら教材準備をするのは時間も労力もかかることであったが，楽しいことであった。慣れた英語プロパーの授業に比べると，準備には数倍の時間とエネルギーを要したと言っても言い過ぎではない。

しかし残念なことに，筆者のそうした努力は全くと言っていいほど実を結ばなかった。授業は往々にして空回りし，期待した反応を引き出すこともできず不完全燃焼のうちに終わることが多かった。それは当然学生の不満に跳ね返り，授業後の教室に漂う彼らのフラストレーションの残滓はいやが上にもこちらの徒労感を増幅させたものだった。

失敗の原因は明らかだった。初年度の授業が始まるや否やすぐにわかったのだが，学生の社会知識と英語力が想定していたよりはるかに低く，さらに，クラス内の英語習熟度にもかなり大きな差があって，予定した授業の「基盤」が存在しないに等しかったのである。

上に掲げた科目の概念，そして講義要項にも「それなりの分量は読ませる，

その上で議論する」と書いたことから，何となく意識も英語力も高い学生が選択し受講するものと思い込んでいたのだが, 考えてみれば必修科目である。英語が苦手であっても，大学に入ってから初めて学び始めた言語よりはなじみのある英語で必修科目を履修しようとする学生が多いのは当然のことであった。しかも，筆者自身が宮前(2009:76-77)で報告したように，むしろ「大学に入って初めて英語を学び始めた」基礎レベルの学生の方が英語に前向きになっている傾向が見られる背景があった。初回授業の教室に出向き，前年度基礎クラスで担当した学生たちが嬉々として顔を揃えているのを見たときにやっとそれに思い至ったとは，思えばなんと考え不足であったことか。

もちろんすぐに軌道修正して，英文の難易度も読む分量も当初の予定よりはるかに抑えることにしたのだが，基礎文法が身に付いていないレベルの学生には多少の調整程度ではあまり意味がなかった。英文法の説明ばかりに時間を取られる授業になってしまっているのに，レベルに合致した説明とは言えないため「わからせている」実感があまりない。しかもそのレベルの「読解」に時間を使い過ぎると，「感想」や「考察」に踏み出したくても賞味期限が切れたような言葉しか引き出せない。

問題をさらに難しくしたのは，英語力に自信を持つ層がそうした授業に対する不満を隠さないことであった。彼らは習熟度別導入後の学生なので，1年次では自分に合ったレベルでの英語授業を受けてきている。演習レベルでそれなりの英語を学んできた層にとっては，「読んで議論する」と講義要項に書いてある科目でどうしてこんな基礎英文法の説明をされなければならないのか，不満に思っても当然であった。

しかし，読めない同級生にいらいらする層の学生とて，実は読解力も社会知識も非常に脆弱なのだ。それなのに，自分より英語力が劣る同級生がいることで根拠のない自信を増幅させ，レベルが低い（と感じる）授業に対する不満を募らせる傾向があった。習熟度も意識も多様な学生たちが混在するクラスの運営はとても難しく，今さらながら，習熟度別英語授業のメリットを強く認識せずにはいられなかった。

ともあれ，授業のコンセプトそのものは変えるわけにはいかないし，とにかく正確に読むことを教えなくてはならない。筆者が採った授業方法は，ごく典型的な英語教科書に見られる進め方であった。つまり，最初にそのトピックについての周辺的な知識を与え，必要な基本語彙を教える。それから英文教材の読解をし，内容把握を確認し自分の考えを表明するという流れである。前述のようにトピックそのものを時事問題から厳選することと，読解の後の段階（意見交換や口頭発表，レポート作成など）を重視することをこの科目の「目玉」にしようとしたが，授業の実質としては英語のそれとあまり変わらなかった。

当然と言うべきか，学生による授業評価に表れた満足度は低く，自由記述欄には「これじゃ英語の授業みたい」「文法の説明ばかりで，内容について話す時間があまりない」という記述が目立った。学生の欲求不満も理解できたが，しかし，それに迎合するわけにはいかない。この科目の目的はあくまでも世界諸地域の社会・政治・文化に理解を深めながら「実践的な英語力を増強する」ことなのである。社会知識も英語力もつけようとしないまま，薄っぺらな議論で満足してはいけないことを教えなければならないのだ。読解力の不足を補おうとすればするほど授業は「英語の授業」になり，学生・教員双方の求めるものから離れていくようだった。

3. 「ヘッドフェイク」

こうした授業運営に関する悩みに 1 つのヒントを与えてくれたのは，既に 1 節で述べた，「ヘッドフェイク」という視点であった。この語は主な辞書にも記載がなく[4]，筆者はこの語句に YouTube 上でのランディ・パウシュ教授の『最後の講義』において初めて出会った。彼の正確な語義を示すために，

[4] Google 検索してみると株の動きなどを言うときにも使われるようであるが，その用法でも初出はかなり最近のことのようである。

In market trading a **head fake** is known as a situation in which the market appears to be moving in one direction but ends up moving in the opposite direction. For example, the price of a stock may appear to move up, and all indications prior to that are that it will move up, but shortly after reverses direction and starts moving down.（Retrived October 15, 2009, from Wikipedia）

講義の補遺版とも言うべき著書(Pausch and Zaslow (2008: 39))から該当部分を引用する。

> When we send our kids to play organized sports—football, soccer, swimming, whatever—for most of us, it's not because we're desperate for them to learn the intricacies of the sport.
>
> What we really want them to learn is far more important: teamwork, perseverance, sportsmanship, the value of hard work, and ability to deal with adversity. This kind of indirect learning is what some of us like to call a "head fake."
>
> There are two kinds of head fakes. The first is literal. On a football field, a player will move his head one way so you'll think he's going in that direction. Then he goes the opposite way. It's like a magician using misdirection. Coach Graham used to tell us to watch a player's waist. "Where he's belly button goes, his body goes," he'd say.
>
> The second kind of head fake is the *really* important one—the one that teaches people things they don't realize they're learning until well into the process. If you're a head-fake specialist, your hidden objective is to get them to learn something you want them to learn.
>
> This kind of head-fake learning is absolutely vital. And Coach Graham was the master.

フットボールであれサッカーであれ水泳であれ，親が子供に団体で行うスポーツ競技を学ばせようとするとき，それはほとんどの場合，そのスポーツの詳細なルールや技術を学んでほしいからではない。

ほんとうに学んでほしいのは，それよりはるかに重要なことである。チームワーク，忍耐力，スポーツマン精神，一生懸命やることの大切さ，そして逆境に立ち向かう能力。このように間接的に何かを学ばせることを，私は「ヘッドフェイク」と呼んでいる。

ヘッドフェイクには 2 種類ある。第一のそれは，文字通りの意味で，頭の向きでフェイントをかけること。フットボールの試合で選手が頭をある方向に動かせば，他の選手は彼がそちらに動くと思ってしまう。そこで彼は別の方向に動く。手品師が観客の視線を巧みに逸らせるようなものである。そんなときグレアム監督はいつも，相手の腰を見るように言ったものだった。「へその向いている方に身体は動くんだぞ。」

ほんとうに重要なのは，第二の意味のヘッドフェイクである。つまり，人に何かを，それがほんとうに自分のものになるまで，自分が学習していることに気づかせることなく教えてしまう技術のことである。ヘッドフェイクの達人は，学ばせたいことを学ばせるという目的を，表に出さないまま実現してしまう。

この第二の意味のヘッドフェイクは，きわめて重要である。そしてグレアム監督はその名人であった[5]。

この，「第二の意味のヘッドフェイク」が，授業運営に行き詰まりを感じていた筆者に新たなインスピレーションを与えてくれた。学生たちは，「英語の授業ではないはずなのに」英語主眼に進められることに抵抗を感じているのだ。英語の読み方ばかり指摘されるから嫌になってしまうのだ。それなら，それを意識させなければよい。英語を意識させないまま，別の作業をさせながら同じ目的に達する手だてを考えることはできないだろうか。

4. 「ヘッドフェイク」を利用した「国際事情」授業

筆者はこれまでの授業方向方法を完全に考え直すことにした。すなわち，これまで採っていた「英語ができないのだからまず英語を教える→英語をわからせることによって社会・政治問題に接近する」というアプローチから，「社会・政治問題を理解することに集中する→その際に英語から情報を取る場面を折り込み（その頻度を徐々に増やしていって），いつの間にか英語を読ませていく」というアプローチに転換したのである。講義の目標「世界諸地域の社会・政治・文化に理解を深めながら実践的な英語力を増強する」は変わらず，従って講義要項も以前とほとんど変えていない。しかし，同じ目的に接近するにも，どちらに軸足をおくかで接近方法は大きく異なって見えてくる。学生自身に意識させる軸足と担当者が意図する軸足を違えることで，学生に抵抗を感じさせないまま「いつの間にか」英語力を増強させていくことができるかもしれないと考えた。

4.1　2009 年度「国際事情」授業の進め方

そういう観点から，2009 年度，筆者にとって 3 年目となる「国際事情」の授業では，まずは英語のことは忘れ，今社会で何が起こっているのか，それ

[5] 訳は筆者による。ただし，矢羽野薫訳（2008:59）を参考にさせていただいた。

についてどういう見方がありそうか，自分はどう思うかを話し合うことから始めることにした。英文を与えるのはそれなりの背景知識が備わってから，それも，最初から英文を読むのではなく，まずはざっと目を通してまずヒントになる人名，表現，単語を発見し，想像し，調べることを習慣づける。LL教室利用の利点をフルに活かしてネットで検索させながら，できる限り学生の意識を「知りたい」状況に持っていってから英語に向き合わせる。それから読解をし，語彙の定着を図るわけだが，ここでも意識の中心は「知りたい情報を正しく得ること」に置かせ，英語のことはあまりうるさく言い過ぎないよう心がける。最後に，感想や考察を口頭，または自己表現文で表明させる。一連の流れは前もって準備したワークシート[6]で誘導し，可能な限り学生の自己表現を引き出しフィードバックして，理解を深めていくように努めた。

それぞれのステップの授業方法について，以下で詳説する。

4.1.1　Warming-up—「今週の重大ニュース」

2009 年度に改変したことの第一は，授業の始め方である。毎回，授業のウォーミングアップとして，最初の十数分を使って学生に最近のニュースの中で心に残ったものについて，なぜそれを選んだのか，それについてどう考えたのかを発表させることにした。前述したように，学生の社会問題に関する興味や知識は，担当前に想定していたよりはるかに低かった。新聞も読んでいない学生が大半で，英語圏うんぬん以前に，ごく身近なできごとの知識も希薄であった。そういう土台のところに英語ニュースを与えても実感の伴わない空虚な暗号解きにしかならないので，まず，少しでも外の世界に興味を持つきっかけを作ろうとしたわけである。

毎回教室の適当なところからマイクを回し，自由に発表させる。取り上げるニュースは国内であろうが国外であろうが，政治・経済に関わるものであろうが三面記事であろうがスポーツ記事であろうが全く問わないことにした。

---

[6] ワークシートのサンプルを Appendix に掲げておく。以下で紹介する授業展開と合わせて参考にされたい。

誰かが発言したニュースについて，付け加えたいこと，反論したいことがあればその話題に戻ってもかまわないし，ほとんど他人が知らないローカルなできごとであってもかまわない。ただし，それがどうして自分にとって重大なニュースだったのか，何に怒り何に驚いたのかを自分のことばで説明させる。

授業本体でもその時々の時事問題をトピックとして選んであるので，この段階で学生の発言がそちらに向けばそれをきっかけに他の学生の発言も引き出すよう水を向けたりはしたが，こちらの意図と関係ないニュースに学生の発言が集中するときはそれに任せるようにした。結構時間がかかってしまい，授業が計画どおりに進行しないことも多々あったが，とにかく基礎体力作りと割り切り，毎回必ず少なくとも半分の学生に発言の機会を作り辛抱強く待つことにした。

最初のうちは全く話す内容が見つからなくて黙り込んだり，あるいは背伸びをして海外のニュースを選んだものの自分のことばで語れずただ新聞記事を棒読みするような学生もいたりしたが，2 ヶ月くらい経つうちに徐々に実感を伴った発表をするようになり，互いの意見を聞き，自分独自の見方を披露しようとする余裕もできてきた。彼らの意識を活性化するウォーミングアップとして，また，発言しやすい雰囲気づくりとして，一定の意味はあったと考えている。

4.1.2　Pre-reading activities—背景知識の増強

このウォーミングアップからその日のトピックへと学生の興味をつなげていく。もともと興味を引きそうなトピックを選んでいることもあり，学生の発表した「重大ニュース」のどれかとは重なることが多いので，それほど無理をしなくてもそちらに誘導することはできる。今年度も取り上げたいトピックには事欠かず，オバマ大統領のプラハ演説から始まって核廃絶に向けた国連安保理決議，環境問題，日本の政権交代など，継続して追いかけたい時事問題は目白押しであった。

ここで英文記事のコピーを配布するわけだが，学生は英文を渡されるとまず 1 行目に出てくる知らない単語を辞書で調べることから始める傾向があるので，それをさせず，全体を大きく掴み徐々に細部に目を向けさせるように「仕向ける」ワークシートを作成しておき，記事と同時に補助教材として配布する。

ワークシートではまず記事の見出し・小見出しからニュースのあらましを読み取らせる作業をするが，既に前段階の「重大ニュース」発表のウォーミングアップでニュースの大筋は把握できていることが多いので，このタスクは単に既知の内容を英語で確認する作業となる。自分の知識から該当する英単語，英語表現を発見する作業とも言えるわけで，このプロセス 1 つとっても「知らない英単語を調べる→文意を取る」という慣れ親しんだアプローチとは逆である。

次に，その記事の中に出てくる人名や組織名について，それがどういう立場の人物，あるいは組織であるかを答えさせる。わからなければ CALL 教室を使用している利点を活かして自由にネットで調べさせ，どんどん発言させる。検索が上手な学生もいればいつまでも必要な情報にたどり着けない学生もいたりして，これもまたゲーム感覚でありながらよい訓練になる[7]。

ついで，その立場の人・組織であるならこのニュースに対してどのような反応をするかを推測させる。詳しい推測ができない場合でも，少なくとも positive/negative，happy/unhappy の予想だけは必ずつけさせる。これは，類推する力を鍛えると同時に，自分の予想が当たっていたかどうかを確認したくなる，つまり「該当する場所を見つけて英文を読み取りたくなる」ための動機づくりである。

一例として，後期最初の教材にした，鳩山首相が温室効果ガスを 2020 年ま

---

[7] こうした作業が可能になることこそが，CALL 教室の大きな利点の 1 つである。ただ，自由に PC を使用させると，教員側の意図から逸脱したタイミングや用途で PC を使用する学生が出てくるのも事実であり，授業中に注意深くモニターチェックをしたり，こまめに（個別使用を封ずる）ロックをかけたりする配慮が必要になる。

でに 90 年比で 25%削減することを国際的に公約したニュース[8]を挙げて説明しよう。学生に配布するコピーには Yukio Hatoyama，Taro Aso，Yvo de Boer, Masamitsu Sakurai，Keizai Doyukai，UN Climate Change Secretariat，December's climate talks in Copenhagen，Kyoto Protocol と言った固有名詞やキーワードなどに下線を施しておき，社会的にどういう人物であるか，どういった組織・会議・内容であるか，（人物であるなら）このニュースに際してどういう反応をしそうか，知っていることやネットで調べたことを自由にワークシートに書き込ませる。このトピックに関しては，前期末の授業でも当時の麻生太郎首相の発言が日・米・英でそれぞれどのように報道されたかを扱っていたので，その記憶も背景知識として呼び覚ましておく。

場合によっては，ワークシートには the plan, the resolution などの語句に下線を施しておいてその内容を考えるタスクや，それぞれの人物の発言部分をマークするタスク，論理構造を読み取るヒントになる連結語句（接続詞や副詞）をマークするタスクなども与え，極力，細部にとらわれずニュース全体の論調を大きく捉えさせるようにする。

これらのタスクは言うまでもなく，「知りたい」情報をはっきりさせ，どこを読めばその情報を見つけられるのかを考えさせる練習を，つまり英文読解技術の獲得を意図しているのだが，「正答であるかどうかはどうでもいい，あなたはどう思う？」「どうしてそう思う？」「手がかりはどこにある？」と問いかけていくことで学生はずっと気楽になり，ほとんどゲーム感覚で答えている。ヘッドフェイクである。

4.1.3　Reading

それから皆で欲しい情報がある場所を特定し，その部分を訳読し，それぞれの予想が合っていたかどうかを確認する作業に移る。このワークシートは

---

[8] 使用したのは BBC News の"Japan vows big climate change cut," http://news.bbc.co.uk/go/pr/fr/-/2/hi/science/nature/8241016.stm(Published/Retrieved Sept.7, 2009, from BBC News). 補助教材のワークシートは Appendix のサンプル(1)。

電子ファイルの形で個々の学生の PC に配布しているので，予想が間違っていたら好きな色でマークして正答も書くように指導する。最初の予想がどう間違っていても減点対象になどはしないと言うと，学生はさらに嬉々としてゲーム感覚で色とりどりに「発見」を書き込んでいる。

ここでのポイントも，極力，頭から解釈していく読み方を排し，あくまでも必要な情報を取るための読み方に慣れさせることである。基礎文法が十分でないのだからやや乱暴ではあるのだが，あえて「知りたい」と思う情報をはっきりさせ，背景知識や想像力などを総動員して知りたい情報を力づくで読み取らせるわけである。

乱暴ではあるがそれなりのメリットはあって，こうすることによって日本語になっていない妙な「訳」をすることが少なくなる。従来のクラスだと単語をつなぎ合わせて遮二無二「日本文」を作り上げてそれ以上考えようとしない学生が往々にして見られるものだが，このクラスではそういうことが目に見えて減ってきた。意味のわからない訳文もどきを作ることが読む目的ではないと，こちらから言ってきかせる必要などなく理解したからだろうと思う。これもまた，ヘッドフェイクの効用である。

欲しかった情報が確認でき記事の論調を大掴みにできたら，それ以上細部まで読むかどうかはその時々で異なる。ここで紹介した BBC ニュースは短く読みやすかったので細かいところにも目を向けつつ全体を読むことにしたが，長いものや複雑な題材は情報の核が読み取れたところで読み捨てる。それも「普通の」読み方なのだから，常に隅々まで解釈ができなくともこだわらないことにする。

4.1.4　Post-reading activities—知識を定着させる

読み取りの後，語彙の定着をチェックする。そのニュース記事に出てきた語句のうち，民主党，自民党，温室効果ガス，地球温暖化，気候変動，削減，目標といったぜひ覚えて欲しい重要語は日本語から英語に，due to, dependent on, lobby against, mention ~ by name など覚えておきたい英語表現は英語から

日本語に直すというタスクで，これもワークシートに与えておく。なるべく記事も辞書も見ないで答えること，自力で答えられないものは調べてもよいが，後で自分でわかるように黄色でマークしておくことを義務づける。時にはそれらを組み合わせて英作文練習もさせる。実はこの部分は「典型的に英語の授業」をしているのだが，ここまでくるころには学生の英語に対する抵抗感は減っている。

最後に，読みっぱなしにしないために，この記事を読んで考えたことを自由に記述させる。このときはAl Gore 氏のビデオ教材 *An Inconvenient Truth* も視聴しその感想も付け加えさせた。それぞれが書いたものは適当に抜粋してFood for Thought[9]としてまとめ，次週にファイルとして配布する。解答済みのワークシートはファイルの形で回収しているので，編集作業にはそれほど時間がかからない。発言者の名前も入れておき，誤解が残っている場合はコメント機能を使って訂正を書き込んでおく。誤訳に気づかせる最後のチャンスである。このファイルは友人がどのようなことを考えているかを知り議論を深める材料になり[10]，同時に次の課題についてはもっと深い考察を披露しようという競争心を刺激することも意図している。

4.2　ヘッドフェイクの成果

以上，ヘッドフェイクを利用した「国際事情（英語）」授業の試みについて紹介してきた。英語力の十分でない学生たちに「意識させないように」英語を読ませようというのだからかなり無理があるのは承知の上であったのだ

---

[9] 『思考の糧』。ひとりひとりの学生の自己表現が互いの考えを深める材料となることを期待して,まとめファイルをこのように呼ぶことにした。これを「マイコンピュータ」の中の教員別課題フォルダにいれておくことにすると, 次の授業が始まる前, 早めに教室に来てアクセスし，熱心に読んでいるようである。

[10] この回の学生の発言には「Al Gore 氏は，家庭レベル，個人レベルで何ができるのかということを言っていない」という指摘があり，それをきっかけにこのビデオのサイトの”Take Action”の頁に行けば書いてあることを教え，そこに出ている”10 Things to Do”を読み取ったり”Calculate Your Impact”に数字を入れてみたり，さらに考察を深めることができた。

が，実際にやってみると，この方法には，前述したような奇妙な和訳の減少以外にも，明確なメリットがいくつかあることがわかってきた。

メリットの 1 つは，「読む」という作業には狭義の英語力以外の力が多分に関わっていることを，教師が口を酸っぱくして言ってきかせなくても学生自身が体感できること，第二に，それらを総動員して「攻め」の姿勢で読むことに少しずつでも慣れていく様子が見えること，そして第三に，その結果「英語だから」という障壁意識が少しずつ薄れていくように見えることである。こうしたメリットは，常に英語の授業で伝えたいと努めているのに必ずしもうまく伝わっているとは言えないことばかりであった。それがこのクラスでは，英語のことはあまりやかましく言わないようにと心がけていたのにもかかわらず，伝わっていく手応えがあったのである。

クラスの雰囲気も学生の反応も少しずつ上向いてきた。授業評価の「総合的に評価してこの授業を受講してよかったですか」という項目の数字は，19 年度後期 3.7，20 年度前期 3.6，20 年度後期 3.7 に対して 21 年度前期 4.1 となった[11]。加えて自由記述欄にも，「扱う題材がすごくおもしろかった。自分は英語が得意ではないが，楽しく授業ができた」「この授業は英語を学べるだけでなく，社会で起きているものごとの見方がたくさんあるということに気づかされて，とてもワクワクします」「英語力だけを必要とする授業でなく，日本語での思考力を求められる授業だったと思います。一緒に考えている感じがとても楽しかったです」と，前向きな評価が見られるようになった。英語力が求められているところには確実に気づいているのでヘッドフェイクとしては失敗だったのかも知れないが，少なくとも，「英語の授業みたいで嫌だ」「文法ばっかりで話す時間があまりない」という初年度の不満は聞こえなくなった。

さて，それでは，担当者の真の意図，英語読解力の方は増強できているの

[11] 「一部法学部 『学生による授業評価』 マーク回答集計結果」。専修大学ポータルサイトで閲覧可能。ただし，21 年度前期分の数字に関しては，21 年 10 月現在，まだ公開されていない。

であろうか。狭義の英語力の伸びという意味であればTOEFL®，TOEIC®などの客観テストで調査するしかなく，それは実施していない。またたとえ実施したとしても，このようなやり方で短期間に有意な伸長が期待できるとは思わない。しかし，広義の英語読解能力を実証するものとしてなら，いささかのデータがある。今年度，筆者はこの「国際事情」の他に，同じ学部同じ学年の英語（演習）クラスを2コマ担当しているのだが，それらのクラスと比べてあまり遜色のない成績が出ているのである。

一例を挙げよう。前期末試験のとき，最後の実力問題として授業で扱っていない新聞記事を出したのだが，英語クラスのうちの1つ（「英語読解」）でも時事問題を扱っていたので，そのクラスにも「国際事情」と同じ問題を含めてみた[12]。いずれのクラスにも最近の時事問題から3題出題してそのうち任意の1題について概略を書かせることにし，同じように予告しておいた。結果は，20点満点で国際事情クラスの平均点が16.12点，英語演習クラスの平均点が10.7点であった。狭義の英語力の差（演習クラスは英語習熟度が上位15~20%の学生のみで構成されているのに対し，国際事情は基礎から演習まで幅広い習熟度の学生が集まっている）を考えると，これは大きな点数差であると言えた。

また，2つめの検証実験として，後期最初の授業では3クラスとも全く予告なしでニュース記事を与え一定時間で読み取れた概略を書かせてみた。与えたのは3クラスとも同じ，見出しと2〜3行のパラグラフ14個から成る新聞記事である。15分間でできるだけたくさん読みそれぞれのパラグラフで何を言っているのか書くこと，全訳である必要は全くなく順番に答える必要もない，わかるところからわかることを書くようにと指示して，読み取りの正確さによって1パラグラフ5点満点で採点した。全てのパラグラフが正確に読み取れれば70点（5点×14パラグラフ）となるが，15分という制限を設けたこともあり，もちろんそこまでは期待していない。パラグラフの内容が

[12] もう1つの演習クラスは「英語読解表現」であり，英作文の鍛錬を授業の主な趣旨としていたため，このテストは実施しなかった。

ほぼ捉えられていれば 3 点とし，それが 10 パラグラフ程度読み取れること，すなわち 30 点くらいが実施前の期待値であったのだが, 結果は残念ながらそれに遠く及ばず，「国際事情」の平均点が 16.9 点，英語演習クラス「読解」19 点，「読解表現」18.6 点であった。長期休暇明けの最初の授業であったので，やむを得ない数字だったかもしれない。

この調査においては，数字の上では英語演習クラスの方が上であったのだが，筆者にとってはそれより気になる発見があった。英語演習クラスの解答の中には，時として，常識や思考が欠如したように思われる訳語や訳文が散見するのに対し，国際事情の方ではそういうことがほとんどなかったことである。

例えば，Democratic Party leader Yukio Hatoyama is due to take over as prime minister on 16 September, after a resounding election victory in August. という文に対して，英語基礎力はあるはずの演習クラスで，「首相として支配権を接収した」とか「鳩山氏は 11 月 16 日まで首相を勤め上げた」などという，自分の訳出した内容に無神経であるように見える表現や，「民主党」でなく「民主的な党」，「首相」ではなく「第一の大臣」など，日本人大学生としての常識を疑うような訳語が見られた。また，「鳩山氏が首相になったためである」というような訳文もあったが，これは due to が「ーのせいで，ーのために」という意味を持つことを知っているためにこの文脈でもその知識から自由になれなかったものであろう。こうした誤訳は，社会常識や英文法知識の欠如というよりも，もっと根本的に，英語読解を何か規則に基づく単語の置き換えとしか捉えていず，「何らかの意味のあるメッセージを受け取る」というコミュニケーションの姿勢そのものが欠落していることから生じているように思えた。国際事情の方には英語の品詞や基本的な語順についての理解が十分でない学生もいるのだが，そういう不安を抱かせる記述がない。得点そのものは英語クラスより下ではあり，時事問題に限定しての「英語力」に過ぎない可能性はあるものの，そういう意味では評価してよいのではないかと感じた。

4.3　習熟度別への１つの「アンチテーゼ」として

4.2 節で，学生はこれらの作業を通して「情報を得る読み方」を体得しつつあり，若干の成果も表れている，それがヘッドフェイクの効用であると述べた。成果を実証しようとする試みは，既に 4.1.3 節で述べた授業内での感触を裏付けるものとなり，同時に，あらためて，何のための英語力か，教養の基盤となる英語力とは何なのか，さらに言えば，英語の習熟度とは何なのかを筆者に考えさせる契機にもなった。

「国際事情」の授業において，早く正確な意味に近づくのはけっして「英語」ができる学生ばかりではなかった。英語力は十分でなくとも常に積極的に「重大ニュース」を探し自分なりのことばで語ろうとする学生の方が，演習クラスの学生たちより時として正確に「読める」のである。その事実は，こちらが言わなくても学生たち自身が理解する。

さらに，それはクラス全体の雰囲気に跳ね返る。2.2 節で述べた演習クラス出身者の「根拠のない自信」や「自分より英語力のない級友や授業レベルへの不満」は徐々に影を潜め，さまざまな力を持つ学生の集合がまとまりのある社会として有機体のように機能しだす感じがあった。基礎クラス出身者も自信たっぷりに存在感のある発言をし，演習クラス出身者もそのクラスに見られがちな固さ[13]もなくのびのびと楽に振る舞っているように見える。これは，狭義の英語力で分けたクラスにはあまり見られない，なかなか好ましい学び合いの雰囲気であると思った。しかも，そういう雰囲気があるときに行う英文法の説明は，習熟度の上下を問わず深く受け入れられる手応えがある。

習熟度別授業導入は間違いなく専修大学の英語教育をはるかに効率的にした(宮前(2009))のだが，こんな風にさまざまな力を持つ学生が刺激し合いながら学び合うチャンスを減じているのも事実であった。やはり英語力は総合力。

---

[13] 担当者たちの感想によると，学部を問わず，基礎レベルは元気でクラスの雰囲気が明るく，一方演習クラスはまじめだが緊張が強く，活気がない，クラスの雰囲気が固いという傾向が見られる。宮前(2009)参照。

表層的な狭義の英語力だけを信じてそれのみを重視する危険性は，常に心に留め置かなければならないと感じた。

5. おわりに

以上，本稿では，ヘッドフェイクという発想をヒントに筆者が試みた英語教育の実践，その成果と教訓について報告した。試行はしてもまだ錯誤まで行っていない，半年の経験から何かを報告しようとするのは無謀だったかもしれない。また，一見英語とは関係のないタスクを通して英語力を増強しようという試みそのものは，わざわざヘッドフェイクと呼ぶまでもなく，既に多くの教員がさまざまな工夫により努力していることであるだろう。それでも，ヘッドフェイクという概念を知り，それを意識的に授業に取り込もうとしたことは筆者にとって非常に重要な転機であったし，たった半年でも学ぶところ，考えるところがたいへん多かった。

Most of what we learn, we learn indirectly (or by “head fake”)とパワーポイントに示したパウシュ教授の笑顔が今も頭に残っている。有目的的に学ばせる方法論から「無意識のうちに」，しかし「深く」学ばせる方法論へ。これは国際事情のみならず，きっと英語プロパーの授業にも発展させていく出発点になると感じている。今年度の経験を第一歩として，来年度はさらに多くのクラスで効果的にヘッドフェイクが使えるよう，試行錯誤を続けたいと思う。

参考文献

宮前和代.(2009),「習熟度別英語授業の実践と成果—法学部の調査を中心に」,『専修大学外国語教育論集』37, 55-78.　専修大学 LL 研究室

Pausch, R., & Zaslow, J. (2008).　*The Last Lecture.*　New York: Hyperion. [『最後の授業—ぼくの命があるうちに』矢羽野薫訳，東京：ランダムハウス講談社]

Appendix

サンプル(1)

Worksheet 1 (Japan vows big climate change cut)

月　　日

番号　　名前

Pre-Reading Activities

1　見出しから，ニュースの内容を予想しなさい。

2　このトピックに関する７月の麻生首相（当時）の発言，およびそれに対する欧米の反応はどのようなものでしたか？

3　以下の人はどういう立場の人ですか？インターネットを使って調べなさい。
また，この人の立場から考えて，どういうことを言いそうですか？予想される発言の趣旨を（　　）内に書きなさい。
★Yvo de Boer (第６パラグラフ)

（　　）

★Masamitsu Sakurai（第 10 パラグラフ）

（　　）

4　December’s climate talks in Copenhagen とは何のことですか？

Post-Reading Activities

1　上の発言予想は合っていましたか？上の（　　）の下に，正しい発言内容を青字で書きなさい。

2　以下の語句を，日本語は英語に，英語は日本語に直しなさい。なるべく辞書もテキストも見ないで答えること。自力で答えられなかったものには，黄色でマークしておきましょう。

①民主党
②自民党
③温室効果ガス
④地球温暖化
⑤削減
⑥(be) due to
⑦(be) dependent on
⑧lobby against
⑨subsidize (subsidise)
⑩mention ～ by name

★この記事を読んで感じたこと，考えたことを自由に述べなさい。

サンプル(2)

Worksheet 2 (UN calls for nuclear disarmament)

月　　日

学籍番号　　名前

1 (1)(2)を読み，このunanimous resolutionの内容をまとめなさい。

2 次の人物は誰ですか？　それぞれ，1 で述べられたunanimous resolutionについてどう反応しそうですか？

・Gordon Brown
・Nicolas Sarkozy
・Hu Jintao
・Mohamed ElBaradei

3 上の人たちの発言はそれぞれどこに書いてありますか？発言部分をマークし，発言要旨を書きなさい。

・Gordon Brown →（　　）パラグラフ
・Nicolas Sarkozy→（　　）パラグラフ
・Hu Jintao→（　　）パラグラフ
・Mohamed ElBarade→（　　）パラグラフ

4 (4)を訳しなさい。これについて，あなたはどう思いますか？

5 Obama大統領の発言はどこに書いてありますか？　→（　　）パラグラフ

・その発言を訳しなさい。

6 (7)中にあるNPTとは何のことですか。

7 (14)を訳しなさい。

8 (16)を訳しなさい。

9 (22)を訳しなさい。

10 次の国の事情はどこに書いてありますか？　その部分をマークし，内容をまとめなさい。

・Iran→（　　）パラグラフ
・Pakistan→（　　）パラグラフ
・India→（　　）パラグラフ
・Israel→（　　）パラグラフ
・North Korea→（　　）パラグラフ

★この記事を読んで感じたこと，考えたことを自由に書きなさい。